

学園 福音化4課 について...

ヘブル 11章 はしばしば「信仰の章」と呼ばれます。始まりから「信仰は」で始まっています。主題が信仰であり、主体が信仰であるということです。それぞれの人物を説明しながら「信仰によって」と記録しているのは、彼らが信仰を持ってそのような人生を生きようになったのではなく、信仰がそのような人生を生きようさせたということです。ひとことでは、他の人々とは違う区別された生き方であったということです。それで聖書が彼らについて証言することは、38節に「この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした」と記録しています。この節の原語的解釈は、「世が彼らを何の価値もない者とした」という意味です。

彼らが世を価値のない所だと思ったのではなく、世が彼らを価値がないとしたのです。ですから彼らは世から殺された人たちでした。

信仰に掌握され、信仰につかまれて肉の死という目的地に引きずられていく人生を生きた人たち。それが正しい道であることを知っていた人たち。石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺されるのが痛くて苦痛で恐ろしかったでしょうし、荒野と山とほら穴と地の穴とをさまようのが大変で不便だったでしょうが、そのすべてを覆う神様の愛と恵みと希望があったのです。

そのような人生を先に生きてくださり、父なる神への信仰を最後まで守ってくださった方がイエス・キリストです。それでヘブル 11章の結論は、それに続く 12章 2-3節です。

"信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。あなたがたは、罪人たちの、ご自分に対するこのような反抗を耐え忍ばれた方のことを考えなさい。あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないようにするためです。"

ヘブル人への手紙 12章 2～3節

*7月 学院 福音化、2課も参考 にしてください。

<https://jpkodomo.com/children/202307/20230702.pdf>